横浜市における市民参加による里山管理の事例

日本野鳥の会普及部　古　南　幸　弘

COPPICE MANAGEMENT ACTIVITIES FOR CONSERVATION UNDER THE CITIZENS' PARTICIPATION IN YOKOHAMA CITY

Yukihiro KOMINAMI　*Wild Bird Society of Japan.*

市民参加による里山管理の一例として，筆者の勤務する横浜市営「横浜自然観察の森」における事例を紹介する。

横浜自然観察の森は，三浦丘陵の北端部，標高50～100mの円海山緑地（約200ha）の南西の一郭に位置する面積45.3haの自然教育施設である。1990年から，雑木林管理を取り入れた市民参加の行事，「雑木林ファンクラブ」を行っている。対象地は園内の「クヌギの林」と名付けられた約1haの区域で，現存植生は平坦地（約2,400m^2）は植栽されたクヌギ林とトウネズミモチ林分，斜面（約7,600m^2；最大傾斜約30°）はミズキ林とススキ草地である。クヌギ林はノシバ草地であった部分に客土し，成木100本と幼樹，低木苗を植樹して1984年に造成された。

行事は年度ごとにメンバーを募集し，毎年40～60人が登録，職員の指導で年間10～11回の活動を中心に行っている。年間の延べ参加人数は311人，1回平均28人が参加した。現在までに行った作業は，斜面のミズキ林内に繁茂したアズマネザサ等の下草刈り，ススキ草地の伐開と落葉樹苗の植樹，苗の保育，つる切り，除伐（トウネズミモチ），コナラのポット苗づくり等である。一方，作業の副産物をつる細工，草木染め，炭やき，炭俵編み，堆肥作りといった形で利用している。

作業の結果，ミズキ林の林床は，開始前に背丈近いアズマネザサが優占していたものが，作業開始後3年後には20～40cm程度に矮小化し，その間に自生の野性草花が徐々に増加しつつある。鳥類では，草原化した林床にキジバトやムクドリが入り込み，採餌するのが見られるようになり，またモズ，ホオジロ，キジといった林縁～草地性の種の営巣が確認されるようになった。